















1984年に医療支援をスタートし、干ばつ対策用の用水路建設、農村復興へと活動を広げた中村哲医師、その 歩みは35年に及んだ。中村医師はまず現地の言葉を覚え、現地の人々との対話を通じ、信頼を重ねていく。 「私たちに確乎とした援助哲学があるわけではないが唯一譲れぬ一線は『現地の人々の立場に立ち、現地 の文化や価値観を尊重し、現地のために働くこと である 用水路建設では自ら設計図を引き、重機を運転 し、泥にまみれて一緒に作業する。その作業には貧しさゆえにタリバンに参加していた農民も参加していた。 「己が何のために生きているかと問うことは徒労である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。



そこに生じる喜怒哀楽に翻弄されながらも、結局はそれ以上 でもそれ以下でもない」荒れ果てた大地は蘇り、農作物は実 り、65万人の生活を支えている。

親子で収穫し、家族で食事をする風景は眩しい。 中村医師は言う「これは人間の仕事である」

中村哲さんに想う

中村哲さんがアフガニスタンのジエララバードで銃弾に倒れてからもう三年が経とうとしています。彼の不在は多くの人 に惜しまれ、大切なものを失った思いは国境を超えて共有されているはずです。

彼の死と入れ替わるように、世界はコロナ禍に襲われ、今もそれは続いていますが、「アフガニスタンの干ばつに目もく れず、ネオンの元で暮らすあなた方の生活の結果ですよ」と中村さんからは言われそうな気がしました。中村さんはいつも 虚飾を嫌い、百の言葉よりも一つの実際の行動だとその態度で示していました。

2001年10月、世界中がアフガニスタン報復に向かい、日本もまた洋上から米軍の軍事行動を支えるために自衛隊を 派遣すると言い出しました。以前から彼のアフガニスタンでの活動を知っていた私は、国会で本当のアフガニスタンのこと を話してほしいと懇願しました。言葉ばかりが虚しく行き交う政治の場を嫌う彼でしたが、何とかひき受けてくれた事は、 日本と日本人が平和の意味を考える大きなきっかけになったと思います。その後の中村さんはペシャワール会の活動として、 何度も日本の各地に呼ばれ、心ある方々が彼の話を聞きたいと集まりました。

亡くなられた今、中村さんの軌跡は中村さんご自身の著作を始め、日本電波ニュースの二十年来の現地取材によって私た ちに伝えられています。

誰もが引き込まれるあの真剣な眼差しや、はにかむような笑顔にはもう映像の中でしか出会うことができませんが、この 映画を通じて、人のために働き暮らすことこそ平和、という中村さんの思いを皆さんと共有できればと思います。

阿豹比亚

上映と同時に、国政報告も開催しますので、皆様からのお声もお寄せください。 お申込み等のお問い合わせは、**阿部知子事務所(Tel**;0466-52-2680)まで